

# 三俣山荘トレイルワークス

# TRAIL MAINTENANCE JOURNAL 2023

2023年の道直し記録とメッセージ

## 風景と道直し



端的に言うなら「沢山の方々に関わっていただいたシーズン」であった。「仮にお金があったとしても人手が足りない」などと嘆いていた昨シーズンから始まった「道直しボランティア」の受け入れも二年目になって形が見えてきた。そして何より印象に残るのは、「道直しが楽しいシーズン」だったと言うことだ。



# 風景と道直し



もくじ

はじめに

山の道、或る老人

「登山道」の成立

道直しをめぐる課題

想像と観察

歩くことのインパクト

道が風景の傷口になるまで

LOW IMPACT HIKING

ダブルストックとノーキャップ

道直し KEYWORDS

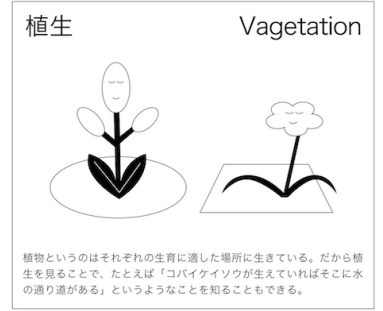
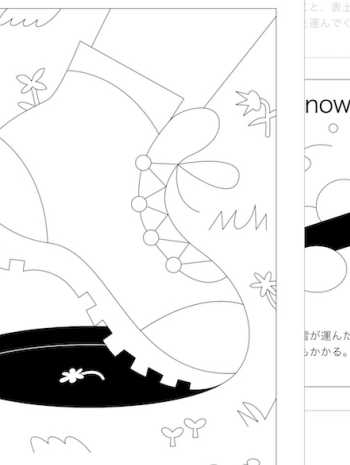
【図解】水切り

【図解】土留め

STUDY

風景とお金

今シーズンの道直しは、この「風景と道直し」の完成から始まった。2022年のシーズン終盤から半年以上をかけ丁寧に制作されたこの冊子により、三侯山荘における道直しがどのような背景や思考や性質を持ったものであるかが、あらためて表出し、誰かと共有することも可能になった。また、様々な道直しの考え方や方法がある中で、初めて三侯山荘の道直しに参加される方やボランティアに訪れる方々と、どんな風景を目指して道直しをするのかを一緒に考えるための基準点にもなった。ここでは、その「風景と道直し」のページを少しだが紹介したい。



ある試算によると、山に登らない人と比べて、山に登る人が山岳や登山道の保全に払っているお金、その差額は、年間でプラス50円/人に満たないという。この金額が多いか、少ないか、どのように感じるかは指さん次第と聞きたいところではあるものの、正直なところ少ないと思うのである。けれど一人ひとりの登山者には、「50円しか負担していない」というような実感はないのではないだろうか？というのも、多くの山へ登る方々は、それなりのお金をかけてギアを買い揃え、時に長距離移動の交通費を支払って登山口へアクセスし、山小屋での宿泊なり前後泊の代金まで支払うのだから、その総額はなかなかのものになる。そういった意味で、山にお金をかけていないという感覚にはならないだろうということなのだが。しかしそこのお金というのは、たとえ山小屋で支払っているお金でさえサービスや商品の対価なのであり、フィールドの持続性を直接的に支えるものではない。ただ、その中にも山小屋などから人員やお金を割いて山岳や登山道を保全している分があって、これらを登山者からのお金だということにするならば、一人あたりの負担は年間50円未満ということになるのだ。

けれども、これがテーマパークだったら、フィールドに対する利用者負担が年間50円というわけにはいかないはずである。それどころか、ホテルへの宿泊やパーク内の食事とは別に、入場料としてハイシーズンには1万円弱になるバス代金をプレイフィールドに支払うだろう。しかも年間ではなく1日につき。無論、比較できない部分もあるから引き合いに出す程度にしたいが、要は、いくら山岳というフィールドが「本来そこにあった自然」だからと言っても、人々が立ち入った自然が放っておいても美しく安全に維持されるわけではないという事実は、もっと認識されてもよいだろうと思う。むしろ広大で、厳しい環境（それ自体は自然ではあるのだが）のなかにあるのだから、登山道や周辺の植物、付帯的な施設などを最低限保全するだけでも多くの力が必要とされることもある。つまりそれはお金もかかるということの意味している。だから1dayバスポートに8,000円払うかどうかはさておいても、年間50円という数字には違和感を覚えるを得ないのだ。現に多くの場所では、発展性など望むべくもなく、現状維持としての保全さえ追いついていないのだから。もっとも、近年では登山者が任意で入山協力金を負担する場合もあるけれど、それにしたって数百円という設定であり、私たちが日常的に数百円を支払っているものごとと、フィールドから得ているものを並べて考えると、これを妥当だと感じてしまってもよいのだろうか？

けれどもなお金のお話に終始したいわけではない。問いたいの「風景の価値」についてなのだ。私たちがやりとりしている山にまつお金。それは登山者であれ、山小屋であれ、山岳ガイドであれ、あるいは都市のギアショップであれ、フィールド（山岳自体）とそこで体験に多くの人が価値を見出し、またそれを求めるが故に成り立っているはずである。けれども私たちは、ウェアやザック、宿泊や山荘でのビールにはお金を払えど、それら様々な価値の土台になっている山岳自体へ、感じているものに相応しい態度を示しているのか？

山との関係で生まれている価値の、その源泉はなんだろうか？ きっと私たちは、このことについてもう少し考えてみる必要があるし、それが、山岳自体や、登山を通して感じ得ることが出来る価値を時に高め、また未来へつなぐきっかけにもなるのではないだろうか？

工事完了から三年足らずすでにバラバラに崩壊している荒れた道は歩きにくくなり、風景はさらに毀損されてしまった自然と、その風景に根ざした道直しとはなんだろうか？

## 「風景と道直し」

企画・執筆・編集：石川吉典、伊藤敦子  
イラスト：楡崎萌々恵  
写真：石川吉典、井上実花

販売価格：1,500円（道直しへのドネーション込み、売上の約半分）

### 歩くことのインパクト

山に与えるネガティブインパクトを取り除いていくなら「歩かない」のが一番である。ハイカーにとっては元も子もない極論だけれど、そのくらい「歩く」ということは、自然に対するインパクトになっているという意味で。

イメージしてみてもほしい。誰かが草原の上を歩くと、足下の葉や茎が押し潰される瞬間を。それが繰り返されることで地上の層は薄くなり、土や根が露出しはじめるだろう。道のはじまりである。そうしてまた誰かが駆ければ地面はさらに崩れもするし、あるいは根が伸び伸びできるふかふかだった土は固くなるし、また覆うものがなくなった表土には日光が当たりやすくなる。やがて乾燥し、根が枯れると、土も留まっていられない。

こうなれば、それまで複雑に生えていた草木を偲い、網目のように分散して山を潤していた水が、踏み分け道に集中して流速を増していくのだ。脆くなった根と土はたちまち流失してしまう。つまり、踏み分け道が水を集めはじめたとき、それは草原のなかで明らかな傷口となる。点々とした踏み跡だけならば、いずれ自然の回復力で元に戻っていくものが、戻りにくくなる一線があるのだ。その傷口をトレスして歩くことでどうなっていくのかは、もはや言うまでもないだろう。

けれども私たちは、ただ一人の人間が歩くだけならば、風景を大きく変えてしまうほどのインパクトにはならないことを、広大な自然のなかに生息している熊がそこを歩き回っているようなことか知られている。確かに「歩く」ことはインパクトになる。然し私たちの歩き方で、その影響の度合いは変えることができる。山にインパクトを与えてきたのが人間の集合ならば、そのインパクトをやわらげるのもまた人間の集合なのかも知れないから、これもまた多くの方と考えたいレイルの話なのだ。

## STUDY 2



大掛かりに整備された登山道がつづいている山で見かけない大量の丸い石に違和感を覚えるが川からわざわざ運び込まれたもの登山道といっても色々だ



# 見えてきたもの

「沢山の方々に関わっていただいたシーズン」となった2023年の「道直し」を経て振り返りたいいくつかのこと。

2022	2023	2024
12	41	?

## 人の関わりが増えたわけ

なぜ道直しに関わる人が増えたのか。理由はいくつか考えられる。例えば、ボランティア受け入れ体制が整ってきたことにより、希望者を積極的に受け入れるようになったこともひとつだろう。参加希望者からの問い合わせから、事前説明、入山、オリエンテーション、自然観察会、実作業、毎日の振り返り会、下山までの基本フローができたことは大きい。また、中身についても、オリエンテーションの教科書としても使える冊子「風景と道直し」の完成により、伝えるツールができたことで一定の質が生まれ、また安定した。一方、参加者が増えた前提として、ボランティアへ来るに至る皆さんのモチベーションの高まりもある。作業のベースキャンプともなる三俣山荘は、北アルプスのなかでも最奥のエリアにあるわけだが、多くの方が作業時間以上の移動時間をかけて参加していることから考えても、そのモチベーションの高さがうかがえる。ただ、おそらく現時点で、三俣山荘でのボランティア受け入れにおいて最も特筆すべきポイントは、「体験」を特に重視していると言う点ではないかと思うのだ。つまり、滞在期間を通してどのような「体験」を提供できるのかを考えて実施した結果、元々高いモチベーションの参加者とのあいだで、体験を通じた気付きや学びの場が生まれる。また、作業のあとは毎日必ず振り返り会を行い、それぞれの体験を他者と共有する。その中でさらに気付きは増えていくのだ。どうやらそうした気付きや学びが皆さんのなかで得たものとして印象に残り、レポート意思に繋がっているようだ。派手なイベントを打ったからなどではなく、前の年に丁寧に体験をつくったことが今年に繋がったと感じられたことが、2023年の喜びだった。

## 気にも留めていなかったことに気付く

道直しボランティア参加者にとっての「体験」を考えると、ボランティア希望者は「何を求めて来るのか？」を考える一方で、「想像もしていない気付きを提供したい」という思いがある。そして、これこそがポイントであるように思う。何故なら、多くのボランティア参加者は、「山のためにできることをしたい」とか、「これまでと違う山との関わり方」こそ求めているが、そのモチベーションと言うのはとりあえず作業さえすれば、一応は達成できてしまう。そして参加者の多くは、どんな作業をすることで山に関わるのかは想像しながらやってくる。けれど、その作業によってどんな気付きが生まれるのかまで想像して来る人はほとんどいないのだ。だからこそ、作業のなかに気付きがあると、新鮮な発見になり、それが印象に残るのだ。その意味で、オリエンテーションや作業前の自然観察会は、単に作業の説明会ではなく、体験の重要な部分だと考えている。例えば、誰かがトレッキングポールを突いたあとの穴や、それによって傷ついた植生を、多くのボランティア参加者はそれまで気にも留めていなかった。あるいは、丸太の階段だと思って疑わなかったものが、実は土の流失を防ぐ土留めだったことに初めて気付くとか。そのようなことの連続なのだ。正直、初めてツルハシを手にする方の作業一日目は捗らない。けれども、その一日目のなかには多くの気付きがあって、「山を歩く人」から、「山を守る人」へと一人ひとりの視点が大きく変わるのが手に取るようにわかる。

## 「美しく丁寧に」

今シーズンのはじめ、昨年の作業箇所を歩いて決めたスローガンがある。「美しく丁寧に」である。どうしてそのようなスローガンが生まれたかと言うと、昨年、土留め作業をしたいくつかの場所が早速壊れたり、上手く機能していなかったりしたからだ。思い返せば、丸太や石を敷設する際、「まあこんなもので良いか」とか、或いは、ボランティアの方が作業しているから「不慣れなもの仕方ない」とか、いずれにせよ妥協した場所。結果、土留めの役割を果たしていなかったり、のちの雨や雪で土砂が流れ出てしまっただけで単なる丸太のハードルのようにになっている場所もあった。中途半端にやっても意味が無いのだ。自然は容赦ない。こうして、今年は「美しく丁寧に」作業が行われた。「妥協なし」でも良かったのかもしれないが、やはり美しい風景を目指したいから、選ぶ言葉も変わって来る。ボランティアの皆さんにも完成度を求めた。そのように作業した結果、見た目だけでなく、丈夫さもアップした。土留めとしての本来の機能も果たしてくれるだろう。そして丁寧に作業した道が時の経過とともに良くなっていくのは嬉しいし、「良くなっていくのを見たい」と言う気持ちや愛着を生んでいくはずだ。

## さらなる課題

2023年は、沢山の方々の関わりにより、これまでになく道直しが進んだシーズンでもあった。良い方向が沢山ある一方で、さらなる課題も見えてきた。

### ① 作業が進めば良いのか？

手数が増えたこともあって道直しができた箇所は例年より増えた。しかし、手を入れた場所、それは即ちやや人工的な風景でもある。先々の復元のためであるとは言え、丸太やネットが続く単調な風景にしたくはないというジレンマもある。素材や技術、工法など、さらに美しい風景を目指したいものだ。

### ② 人の関わりをどのように成長させるのか？

ボランティア参加希望者は増える傾向にある。しかし、ただ作業をしてもらえば良いわけではない。参加者にとっての山での体験、そこでの気付きや学びが来るたびに深まるものにしてほしいし、そのことがまた山へと還元されるための、仕組みの質を育てていきたい。

### ③ それでも知られていない登山道のこと

作業が進んだとはいえ、北アルプスにおける登山道荒廃の現状や、植生を傷めないための歩き方・ストックの使い方などについての登山者の認知はまだまだ。より多くの一般登山者の認知を高めることが必要だ。



実作業の前に行う自然観察会の様子。足元に沢山の気付きがある。



## 販売物売上ドネーション実績

三侯山荘等での売上の一部が登山道整備への寄付となる「道直し手ぬぐい(2種)」と「風景と道直し」の、今シーズン実績は以下の通りとなりました。ご協力ありがとうございました。

ドネーション単価  
「道直し手ぬぐい」500円/枚  
「風景と道直し」700円/冊

販売枚数  
手ぬぐい(2種合計): 737枚  
「風景と道直し」: 86冊

ドネーション額: 428,700円

2023年に三侯山荘周辺での道直しを行った皆さん63名(団体別、敬称略、50音順)

TOKYO GREEN / KANSAI GREEN: 秋田理紗子、大熊聡子、河村拓也、河村峻哉、小島雄人、武田直之、田口博久、徳岡佐知香、藤島吉伊、藤田ゆり、持田和徳、八木澤龍大、吉田裕樹  
宮城県勤労者山岳連盟(朋友会/石巻山の会): 秋山正樹、佐藤順一、鈴木頼子、武田正利、成瀬忠洋、深田勢子、山口栄/阿部仁志、石森康一郎、伊藤淳子、岡良一、岡勝子、高橋敏男、千葉勝紀、村上由美

個人参加など: 赤田幸久、市川あゆみ、伊藤進之介、入野輝、小川哲也、大田一稀、大西浩、勝俣隆、加藤広太、河谷俊輔、土屋智哉、富田靖典、戸谷悠、福島輝姫、山崎大輔、山本理絵  
山小屋スタッフ: 石川吉典、伊藤敦子、伊藤圭、井上実花、浦坂航太郎、江川七虹、岡部りえ、加藤岳、黒須麻衣、酒井俊介、角倉翔一、高田優斗、千葉木の実、西堀武、野澤優太、藤内美貴、松田歩、村井隆彦、依田恵実、渡辺嶺

本ジャーナルおよび掲載内容についてのお問い合わせ先

ネオアルプス/三侯山荘(石川・伊藤)  
E-mail: info@kumonodaira.net

三侯山荘トレイルワークス TRAIL MAINTENANCE JOURNAL 2023

編集・文: 石川吉典、写真: 井上実花、岡部りえ、石川吉典、イラスト: 檜崎萌々恵

## 2024年も道直しボランティアを募集します!

来シーズンも道直しボランティアを募集します。ご興味をお持ちの方は下記ご参照の上、問い合わせ先までご連絡ください。皆さまのご参加お待ちしております!

### ボランティア受け入れ時期

7月後半から9月末までのあいだで追って日程を設定。

### 日程

- 1日目: 入山+オリエンテーション(座学)
- 2日目: 自然観察会+実作業+振り返り会
- 3日目: 実作業+振り返り会
- 4日目: 下山

### 主要参加条件

- ・実施期間に合わせた3泊4日で三侯山荘に滞在し、作業できる日程を確保した上で参加可能であること。
- ・自力で現地まで往復し、作業をすることのできる体力があること。
- ・体験を深めるため、実作業のみならず、オリエンテーション、振り返り会、および他参加者やスタッフとの意見交換を重視できること。
- ・事前に「風景と道直し」(三侯山荘における道直しについての冊子)を読んだ上で参加すること。

### 宿泊他費用について

- ・ボランティアの三侯山荘宿泊費は5,000円/泊(3食付)→3泊4日で15,000円 ※現地までの旅費や「風景と道直し」購入費用は各個人負担、別途ボランティア保険料が必要



illustration by momoe narazaki